Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-29

黄遵憲「日本雑事詩」訳注稿（十六）

林, 香奈
劉, 雨珍

(Citation)
未名,29:137-164

(Issue Date)
2011-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/0100488576

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100488576

黄遵憲「日本雑事詩」訳注稿（十六）

林　香奈
劉　雨珍　訳注

A　「其一一四」

覆院桐陰夏氣清　院を覆うの桐陰　夏気清らかなり
汲泉烹茗藉桃笙　泉を汲み茗を烹るに　桃笙を藉く
竹門深閉雲深處　竹門深く閉す　雲深き処
盡日惟聞拍掌聲　尽日惟だ聞く　掌を拍つの声

［韻字］清・笙・聲（下平八庚）

B　①**夏氣清**　夏の涼しい空気を言う。宋の胡宏「題法輪寺」（『五峰集』巻一）に「春色初めて收まり夏気清らかにして、路は松檜に分れて崢嶸に入る」とある。②**汲泉烹茗**　泉を汲んでお茶を煮ること。宋の無名氏「仙跡岩題詩」天柱泉に「泉を汲み茗を烹て甘味多く、内に丹砂を隠して赤は更に清らかなり」とある。③**桃笙**　桃の枝で編まれたむしろ。『文選』巻五「呉都賦」に「桃笙象簟」とあり、劉逵の注に「桃笙は桃枝の簟なり。呉人は簟を謂いて笙と為す」とある。④**盡日**　一日中。終日。唐の張旭「桃花溪」（『全唐詩』巻一一七）に「桃花は尽日流水に随い、洞は清谿の何処の辺に在らんや」とある。

C　庭は桐の木に覆われて夏になっても涼しい。畳を敷いて泉を汲んでお茶を点てたりしている。雲の深いところにある竹

の門は深く閉ざされており、終日しんと静まり返って、聞こえてくるのはただ掌を打つ音のみである。

D　園亭を喜び、貧家も亦た花木竹石ありて、位置は幽にして雅なり。門は設けらるるも常に関し、其の庭に行くに、閒然として人無きが如き者なり。余　常に友を訪ねて、筆談すること半日も人の声を聞かず。童を呼び茗を点ずるも亦た手を拍つのみ。人をして翛然として出塵の想有らしむ。客来らば必ず寒具を出し、或は酒漿を呼び、妻子を出して跪きて盞を献ぜしめ、殷殷たるの意　感ず可きなり。

E　①**幽而雅**　奥ゆかしくて上品な様。　②**門設常関**　門は設けられているが、常に閉められている。陶淵明「帰去来辞」に「園は日びに渉りて以て趣を成し、門は設くと雖も常に関す」とある。　③**閒然**　人気がなくてひっそりしている様。『周易』豊卦に「其の戸を闚うに、闃として其れ人無し」とある。　④**翛然**　物事にとらわれない様。『旧唐書』白居易伝に「翛然として順適の際に至りて、幾ど其の形骸を忘れんと欲す」とある。　⑤**出塵之想**　俗世を超越する志。孔稚珪「北山移文」（『文選』巻四十三）に「耿介抜俗の標、蕭灑出塵の想」とある。　⑥**寒具**　曲がり餅の類。また、唐菓子、乾菓子の総称。捻頭、環餅、餲とも。『本草綱目』巻二十五に「寒具は冬春に数月に留まる可し。寒食の烟を禁ずるに及びて之を用う、故に寒具と名づく」とある。　⑦**殷殷**　懇切なる様。

F　日本人は庭を好み、貧しい家でも花や木、竹、石などがあり、その配置は幽雅である。門は設けられているが、いつも閉められており、その庭を歩けば、しんとしてまるで人がいないかのようである。私はよく友人を訪ねるが、筆談して半日経っても、全然人の声を聞かない。童を呼んで茶を入れさせるにも、手をたたくだけで、まるで俗世間から離れた感じがする。お客が来ると、必ず餅菓子を出したり、酒を出したり、妻子を呼び出してひざまずいて酌をさせたりする。主人側の懇

切な気持ちを感じることができる。

G　原本では「覆院」を「満院」に作る。なお、『日本国志』巻三十六「礼俗志」三「園林」の条には次のように記されている。「巨室必有園林、松竹梅而外、多喜植桜花。貧家亦喜為園亭、留一二弓地、花木竹石、楚楚有致。門設常関、窺其門、闃然如無人者，而毎日灑掃、潔無纖塵。」

A　「其一一五」

山深太古日如年　山深くして　太古より日は年の如く
小屋陰涼樹插天　小屋　陰涼しくして　樹　天に挿す
拝疏公庭爭乞假　公庭に拝疏して　争って仮(いとま)を乞い
要従熱海浴温泉　熱海にて温泉に浴するに従わんと要(ほっ)す

［韻字］年・天・泉（下平一先）

B　**①第一句**　山中に暦がないことを言う。庾肩吾「謝暦日啓」に「徘徊厚渥(こうあく)にして、日を比して年と為す」とある。　**②拝疏**　上表文を奉ること。韓愈「施先生墓銘」に「秩満ちて当に去るべきも、諸生　輒ち拝疏して留まらんことを乞う」とある。　**③公庭**　朝廷のこと。

C　山の奥深いところでは大昔から暦がなく、一日はまるで一年のようなものである。涼しい木陰に小屋をかまえ、大木は天まで届こうかという勢いである。官僚たちは競って朝廷に上表文を奉って休暇をもらい、熱海の温泉に行こうとしている。

D　西法に、夏の月に各おの官は給仮三十日を許す。日本も亦た之に仿う。豆州の熱海に温泉有り。老樹は天に参り、遊ぶ者は雲集す。諸省の郎吏も室を尽くして行く者多し。

E　①**雲集**　雲のように多く集まる様。　②**郎吏**　役人。『史記』平準書に「軍功多く越等を用い、大なる者は侯、卿、大夫に封ぜられ、小なる者は郎吏なり」とある。　③**尽室**　家族全員。『左伝』成公二年に「屈巫をして斉に聘せしめ、且つ師期に告げしむ。巫臣　室を尽して以て行く」とある。

F　西洋のやり方によれば、夏には役所では三十日の休暇が与えられる。日本もこの休暇制度に倣っている。伊豆の熱海では温泉があって、古い大木が天まで聳えており、遊びに来る人でいっぱいである。各省庁の役人たちも家族連れで訪れる人が多い。

G　『日本国志』巻三十六「礼俗志」三「温泉」の条には次のように記されている。「相模之箱根、伊豆之熱海、皆有温泉、均在山頂、林樹村落、棋布於下、朝嵐夕霞、気象万変、而夏日晴雨不時、牖間時有雲気往来。村民以竹為筧、引泉至浴室、温暖如湯。因山之磴高高下下、為浴楼酒館、層層重複、幾如蜃楼海市。俗本喜浴温泉、云可治疾、浴者益多。西俗、官省例于夏月給仮避暑、日本仿之、寮吏多尽室行者。」

A　「其一一六」

斜陽紅映酒旗低　斜陽　紅に映じて　酒旗　低く
食榼歸時袖各攜　食榼　帰る時　袖に各おの携う
都為細君留割肉　都な細君の為に　割肉を留め
自拚空酌醉如泥　自ら拚つ　空酌して酔うこと泥の如くなるに

［韻字］低・攜・泥（上平八斉）

B　**①酒旗**　酒屋の看板として立てた旗。張籍「江南曲」（『全唐詩』巻十九）に「長江午日に春酒を酤い、高高と酒旗は江口に懸く」とある。　**②食榼**　おり。榼はもともと酒などを盛る器で、後に樽や箱のような器を指す。『左伝』成公十六年に「公　之を許し、行人をして榼を執りて承けて飲ましむ」とある。また『日下旧聞考』巻一四八に「九月九日、酒具、茶炉、食榼を載す。登高と曰う」とある。

③第三句　『漢書』東方朔伝の故事に基づく。真夏の日、東方朔は漢の武帝に召されて肉を賜ることとなった。ところがいくら待っても担当者がやってこない。東方朔は剣を抜いて肉を切り取り、それを妻への土産として持ち帰った。後に武帝にそのことを咎められると、東方朔は「剣を抜きて肉を割くは、壹に何ぞ壮たるや。之を割くこと多からざるは、又た何ぞ廉たるや。帰りて細君に遺るは、又た何ぞ仁たるや」と答えた。武帝は笑ってその妻のために酒一石と肉百斤を賜ったという。　**④自拚**　自ら一生懸命に。拚は一切を顧みずにやる意。梅堯臣「昭亭潭上別弟」（『宛陵集』巻四十）に「須らく拚つべし一日の酔、便ち作す数年の期」とある。　**⑤空酌**　空腹で飲むこと。自注参照。　**⑥酔如泥**　泥酔すること。正体を失うほど酒に酔うこと。『後漢書』周沢伝に「一歳三百六十日、三百五十九日に斎す」とあり、李賢注に「『漢官儀』は此の下に『一日斎せざれば酔うこと泥の如し』と云う」とある。また、南宋の呉曾『能改斎漫録』巻七「酔如泥」の条によれば、「稗官小説を按ずるに、南海に虫の骨無き有り、名は泥と曰う。水中に在らば則ち活き、水を失わば則ち酔うこと一堆の泥の如く然り」とある。

C　低く掲げられた酒屋の旗を夕日は赤く染め、客は帰る時にそれぞれ折り詰めを持っている。みな切り取った肉を細君のために持ち帰り、自分自身はあまり食べずに空腹で飲んで泥酔状態となっている。

D　酒を嗜み、歌舞を喜ぶこと、『魏志』、『漢書』既に之を言う。今猶お古風なり。大率皆な妝餌の資は飯蔬より過ぎ、遊宴の費は居室より多しと云う。然れども親朋　雅に集うに、皆な相い戒むるに大嚼すること勿れ、少しく羹湯を啜れと。餘は則ち竹　筐を以て袖ちて其の家に帰り、以て妻子に遺る。亦た行　厨有り、小なる木篋を以て二、三層を作す。遊山に甚だ携取するに便なり。

E　①**魏志漢書云々**　『三国志』魏書「倭人伝」も『後漢書』倭国伝も当時の倭国の風習として「人性嗜酒」と記載している。また喪に服するときに、『三国志』魏書「倭人伝」は「家人　哭泣し、酒食を進めず。而るに等類は歌舞に就きて楽と為す」と記し、『後漢書』倭国伝は「喪主哭泣し、他人は歌舞に就きて飲酒す」と記している。②**行厨**　携帯用の弁当箱。庾信「詠画屏風詩」其十八（『庾子山集』巻四）に「行厨　半路にて待ち、妓を載すること一双にして廻る」とある。

F　酒を好み、歌ったり踊ったりするのが好きであることはすでに『魏志』倭人伝や『（後）漢書』倭国伝に記載されているが、今の日本も古風のままである。大体において食事代よりも化粧代のほうが多く、家にいる費用よりも出かける費用のほうが多いという。しかし、親戚友人たちが集まると、お互いの戒めとしてあまり多く食べたりスープを飲んだりはせず、残りは竹の箱で家まで持ち帰り、妻子に土産としてあげたりする。また携帯用の弁当箱があり、小さな木箱で二、三層よりできており、遊山のときに携帯するには大変便利である。

G　『日本国志』巻三十六「礼俗志」三「外史氏曰」の条には次のように記されている。『後漢書』言倭人嗜飲食、喜歌舞、至今猶然。余聞之東人、大抵弦酒之貴過於飯蔬、游宴之費多於居室。」

A　「其一一七」

湘簾半捲綺窻開　湘簾半ば捲き　綺窓開く
帕腹帩頭爛漫堆　帕腹　帩頭　爛漫として堆し
道是蓮池清淨土　道う是れ　蓮池清浄の土にして
未妨天女散花來　未だ天女の散花し来るを妨げずと

［韻字］開・堆・來（上平十灰）

B　**①湘簾**　湘竹（湘水のほとりに産するまだらの竹。湘妃竹とも）で作られた簾。明の張邦奇「午風亭為序庵太史」（『御選明詩』巻一〇七）に「湘簾　半ば捲かれて飛花入り、正に是れ午風の客を吹くの時」とある。　**②綺窓**　あやぎぬを張った美しい窓。「古詩十九首」其五に「西北に高楼有り、上は浮雲と斉し。交疏して綺窓と結び、阿閣　三重階なり」とある。　**③帕腹帩頭**　帕腹は腹巻で、『釈名』釈衣服に「帕腹は其の腹を横帕するなり」とある。帩頭は頭巾で、古楽府「陌上桑」に「少年は羅敷を見れば、帽を脱ぎて帩頭を著く」とある。　**④爛漫堆**　爛漫とは溢れ散らばる様。韓愈「南山詩」に「前は低く開濶を劃し、爛漫として衆皺を堆す」とある。

④天女散花　『維摩経』観衆生品第七に「時に維摩詰の室に一の天女有り。諸天人は説く所の法を聞き、便ち其の身を現す。即ち天華を以て諸菩薩・大弟子の上に散ず。華は諸菩薩に至らば即ち皆な堕落し、大弟子に至らば便ち著きて堕ちず。一切の弟子の神力は華を去りて、去らしむる能わず」とある。

C　竹の簾は半ば掲げられて美しい窓が開かれ、腹巻や頭巾などが堆く散在している。人々が言うには、ここは蓮池の浄土であり、天女が散華に来ても一向におかまいなし、と。

D　潔を喜み、浴池最も多し。男女亦た同浴を許し、近ごろ禁令有るも、然れども積習除き難し。相い去ること僅かに咫尺なるも、司空見慣れて、渾て慚色無し。

E　**①近有禁令**　東京では明治二（一八六九）年、男女混浴の禁止令が出されたが、あまり効果が見られなかったため、明治三年六月と明治五年三月にも繰り返し禁令が出された。全国的に男女混浴の禁止が布達されたのは、明治三十三（一九〇〇）年五月の内務省令第二十五号「客ノ来集ヲ目的トスル浴場ニ於テ十二歳以上ノ男女混浴セシメサル件」においてであった。**②積習**　長い間積もってきた悪い慣わし。**③咫尺**　大変短い距離。咫は周代の長さの単位で約十八センチ。**④司空見慣**　ありふれたこと、見慣れたこと。司空は官名。周代に土地・人民を司った。明・清時代には工部尚書の別称となる。劉禹錫「贈李司空妓」（『全唐詩』巻三六五）に「司空見慣れて渾て閑事、蘇州刺史　腸を断尽す」とあり、宰相を勤めた李紳を「李司空」と呼んでいる。

F　日本人は清潔好きで、浴場がとても多い。昔から男女混浴も認められており、近頃禁止令が出されたものの、長年の習慣を除くのはなかなか難しい。浴場では男湯と女湯はほんの僅かな距離しか離れていないが、いつも見慣れているので、いささかも恥ずかしがる様子が見られない。

G　原本では「蘭湯煖霧麝迷離、背面羅衫乍解時。一水盈盈曾不隔、未銷金餅亦偸窺」に作る。

（以上、劉雨珍）

A　「其一一八」

短衣窄袖曼胡纓　短衣　窄袖　曼胡纓
意態縱横一座傾　意態　縦横にして一座傾く
耳後生風鼻頭火　耳後に風を生じ鼻頭に火あり
拓弦時作餓鴟聲　弦を拓いて時に餓鴟の声を作す

［韻字］纓・傾・聲（下平八庚）

B　①**曼胡纓**　模様のない冠の紐。『荘子』説剣第三十に「吾が王の見る所の剣士は皆な蓬頭、突鬢、垂冠、曼胡の纓、短後の衣にして、目を瞋らして語難す」、郭象の注に「曼胡の纓は、麤纓にして、文理無きを謂うなり」とある。　②**意態**　表情や態度。『漢書』広川恵王劉越伝に「栄姫　視瞻するに、意態　善からず、私有るを疑う」、杜甫「天育驃図」に「是れ何の意態ぞ雄にして且つ傑、駿尾　蕭　梢として朔風起こる」とある。　③**一座傾**　一座の者が圧倒されること。『史記』司馬相如列伝に「長卿　病もて往く能わざるを謝すも、臨　邛令　敢て嘗食せず、自ら往きて相如を迎う。相如　已むを得ず、彊めて往くに、一坐　尽く傾く」とある。　④**第三・四句**　『南史』曹景宗伝に「景宗　親しむ所に謂いて曰く、我　昔　郷里に在りしとき、快馬に騎ること龍の如し。年少の輩数十騎と与に弓弦を拓けば、霹靂の声を作し、箭は餓鴟の叫ぶが如し。平沢の中に麋を逐い、肋を数えて之を射る。渇しては其の血を飲み、飢えては其の胃を食らう。甜きこと甘露漿の如し。耳後に風の生ずるを覚ゆれば鼻頭に火出づ」とあるのにもとづく。「鴟」はとび。

C　太い無地の飾り紐のついた短い衣に狭い袖口。思うがままの表情や態度に一座は圧倒される。引き金をひけば、耳の後ろに風が生じ、鼻先に火花が飛び、餓鴟の鳴くような音がする。

D　鎗を習う所有り、鉄を懸けて的と為し、亦た弾を用う。轟然として声を作せば、輒ち流星　迸散す。少年の輩　毎に座に入りて練習し、以て歓笑を為す。

E　①**習鎗所**　「鎗」は銃。射撃練習場のこと。②**轟然**　轟音をたてるさま。柳宗元「唐鼓吹鐃歌」「東巛」（『楽府詩集』巻二十）に「轟然として天自り墜し、乃ち信に神武の功」とある。③**迸散**　四方に飛び散るさま。『三国志』魏書董昭伝に「是の後　幾ばくも無くして、暴風　賊船を吹き、悉く休等の営下に詣らしむ。首を斬り生けるままを獲るに、賊　遂に迸散す」とある。

F　鉄砲を練習する場所があって、そこでは鉄製の的を懸け、弾丸も使用する。爆音をたてて発砲するたびに流星のような火花が飛び散る。若者たちはいつもこの場に来て練習し、楽しそうに笑っている。

A　「其一一九」

解鞘君前禮數工　　鞘を君前に解き礼数工なり
出門雙鍔插青虹　　門を出づるに双鍔　青虹を挿す
無端一語差池怒　　端無くも　一語　差池すれば怒り
橫濺君衣頸血紅　　横に君衣に頸血の紅きを濺ぐ

［韻字］工・虹・紅（上平一東）

B　①**双鍔**　二本の刀。「鍔」は刀の刃。明の胡応麟「送呉文仲観察入賀四首」其二（『少室山房集』巻六十四）に、「燦爛たる明星　轆轤に墜ち、腰に懸くる双鍔　昆吾に並ぶ」とある。また張協「七命」に、「爾　乃ち支離に命じて霜鍔を飛ばす」とある。②**青虹**　『後漢書』霊帝紀に「秋七月壬子　青虹見わる」、『竹書紀年』巻下に「（周敬王）二十六年、晋に青虹見わる」とあり、もとは虹の意。ここでは、刃の青白く光るさまをいう。明の胡応麟「剣泉」（『少室山房集』巻三十六）に、「当年　欧冶の鋳、蓮鍔　夜　花を生ず。赤電　延浦に飛び、青虹　若耶を照らす」とある。③**無端**　理由もなく。たまたまの意。宋玉「九弁」に「蹇　充倔して端無く、泊　莽莽として垠無し」とあり、注に「媒理断絶して、因縁無し」とある。また賈島「度桑乾」詩に「端無くも更に桑乾の水を渡るに、却って并州を望めば是れ故郷」とある。④**差池**　まちがい。齟齬。韓愈「寄崔二十六立之」詩に、「毎旬　我が書を遺り、竟歳　差池無し」とある。もとは不揃いであることをいう。『詩経』邶風・燕燕に「燕燕は于き飛び、其の羽を差池す」、鄭箋に「其の羽を差池すとは、其の尾翼を張舒するを謂う」、また『左伝』襄公二十二年に「何ぞ敢て差池せん」、注に「差池は斉一ならざるなり」とある。⑤**横濺**　明の胡応麟「西湖十詠」其九（『少室山房集』巻五十五）に、「暮に向いて西泠に風転た急なり、渌波　横に濺ぐ石榴の裙」とある。⑥**頸血紅**　宋、羅公升の「霊巌寺」詩其二（『宋百家詩存』巻四十）に「馬嵬の錦韈　戦塵の中、辱井　空しく餘り　頸血紅し」とある。

C　人前では刀を置き、礼をわきまえるが、出かけるときには青く光る打刀と脇差の二本を帯びる。わずかにひと言間違えれば、理由もなく、ほしいままに刀を振り下ろし、人の衣を血に染める。

D　士大夫以上は、旧と皆な双刀を佩ぶ。長短　各おの一あり。門を出づるに横に腰間に挿しはさみ、席に登れば則ち手に

執り、坐に就けば其の旁に置く。『山海経』に既に倭国は衣冠し剣を帯ぶと称す。然れども事を好んで生を軽んじ、一語もて睚眦し、輒ち刀を抜き人を殺す、亦た時時　自殺す。今　帯刀を禁ずるも、刺客　俠士　猶お縦横たり。史公　称す「俠は武を以て禁を犯す」と、惟うに日本は甚しと為す。

E　①**登席**　席につくこと。『礼記』玉藻に「席に登るに前由りせざるを瞭席と為す」とある。　②**山海経**　『山海経』巻九に「君子国は其の北に在り、衣冠帯剣す」とある。　③**睚眦**　わずかなことのために怒りの目で相手を見るさま。『史記』范雎列伝に「一飯の徳は必らず償い、睚眦の怨は必らず報いん」とあり、索隠に「睚眦は相い嗔怒して歯を見わすなり」とある。　④**史公称「俠以武犯禁」**　『史記』遊俠列伝に「韓子曰く、儒は文を以て法を乱して、俠は武を以て禁を犯す」とある。もと『韓非子』五蠹に見えることば。

F　士大夫以上は、もともと皆な長短それぞれ一本ずつ、二本の刀を帯びている。門を出るときは横に腰挿しにし、席につくときは手に持ち、座ればその傍らに置く。『山海経』に倭の国は衣冠し剣を帯びると言っている。しかしながら、事を好んで生命を軽んじ、たった一言にも怒りに目をむいては、刀を抜いて人を殺したり、しばしば自殺したりもする。今では帯刀は禁じられているが、刺客や俠客は依然としてほしいままにしている。太史公は「俠は武を以て禁を犯す」と言っているが、思うに日本はこれがとくに甚だしい。

G　原本では、「解鞘君前礼数工、出門双鍔挿青虹。無端痛飲囲鑪酔、笑看仇人頚血紅」とある。

A　「其一二〇」

當王徽號貴黄華　当王の徽号（きごう）　黄華貴し
時喚臣僚共鬬花　時に臣僚を喚（よ）びて共に花を鬬（たたか）わす
淡極秋容翻富貴　淡極まれる秋容は翻（かえ）って富貴
疏籬茅舎到官家　疏籬（そり）茅舎　官家に到る

［韻字］華・花・家（下平六麻）

B　①**徽號**　旗印。『礼記』大伝に「権度量を立て、文章を考え、正朔を改め、服色を易え、徽号を殊にし、器械を異にし、衣服を別にす、此れ其の民と変革するを得る所の者なり」、注に「徽号は旌旂（せいき）の名なり」とある。　②**黄華**　菊の花。『礼記』月令に「鞠（きく）に黄華有り」とある。　③**鬬花**　唐代、長安の子女が髪にかざした花の珍しさを競ったことをいう。『開元天宝遺事』巻三に「鬬花は長安の士女、春時に於いて花を闘わし、戴き挿すに奇花を以てすること多き者を勝ちと為す。皆な千金を用いて名花を市（か）い庭苑の中に植え、以て春時の闘に備うるなり」とある。　④**疏籬茅舎**　目のあらいまがきと粗末な茅葺きの家。杜甫「陪鄭広文遊何将軍山林十首」詩其三に「旁舎高竹連なり、疎籬　晩花を帯ぶ」とある。また、宋の張孝祥「道間見梅」詩（『于湖集』巻十）に「疎籬茅舎　端無くも恨みあり、故より幽人の与に断腸する有り」、白居易「別草堂三絶句」詩其三に「三間の茅舎　山に向って開き、一帯の山泉　舎を遶（めぐ）って廻る」とある。　⑤**官家**　天子のこと。『資治通鑑』巻九十五晋紀十七、咸康三年春正月の条に、「李顔等曰く官家　称し難し、と」とあり、胡三省の注に「天子を称して官家と為すは、始めて此に見ゆ。西漢は天子を謂いて県官と為し、東漢は天子を謂いて国家と為す。故に兼ねて之を称す」とある。

C　王であることを示す徽号として、菊の花が尊ばれ、時に多くの役人たちを呼んでともに菊合わせを催した。この上なく淡泊な秋の花は、それゆえにかえってその姿は富貴で、茅葺きの粗末な家のまがきに咲く花が、天子の花となったのである。

D　朱雀帝の時自り、始めて菊合を為す。（凡そ両朋に分かち、以て優劣を角（あらそ）う、之を合と謂う。歌を闘わすを歌合と曰い、詩を闘わすを詩合と曰い、扇を闘わすを扇合と曰い、画を闘わすを絵合と曰い、鶏を闘わすを鶏合と曰う。当時の語なり。）　王公以下　各おの物を賜わる。嵯峨帝　嘗て菊花の賦を為す。故に歴朝　尤も菊を賞し、菊　遂に皇族の徽志と為る。今　御苑に尚お菊を栽うること数百盆、盆毎に花を開くこと、五六百枝に至る者有り。花さく時、必ず各国の使者と諸省院の長・次官とを招き竟日の遊を為す。

E　①**朱雀帝**　朱雀天皇（九三〇～九四六在位）。　②**菊合**　左右に分かれて、双方から菊の花を呈して、その花の優劣を競うあそび。③**歌合**　左右の組に分かれて、和歌の優劣を一首ずつ競うあそび。平安貴族の間で流行した。　④**詩合**　左右に分かれて漢詩の優劣を競うもの。　⑤**扇合**　扇に書かれた詩歌やその書風の優劣を競うあそび。　⑥**絵合**　自作の絵などの優劣を左右に分かれて競うあそび。⑦**鶏合**　闘鶏。宮中では清涼殿の庭において行われた。　⑧**嵯峨帝**　嵯峨天皇（八〇九～八二三在位）。『文華秀麗集』『凌雲集』などの漢詩集を勅命により撰した。　⑨**菊花賦**　『経国集』巻一に「重陽節菊花賦」が収載されている。

F　朱雀天皇のときから、菊合が始まった。（二組に分かれて、優劣を競うものを合わせという。歌を競うものが歌合わせ、詩を競うのが詩合わせ、扇を闘わせるのが扇合わせ、絵を競うのが絵合わせ、闘鶏を鶏合わせという。いずれも当時のことばである。）　王侯貴族以下には、それぞれ賜り物が下された。嵯峨天皇はかつて「菊花の賦」を作ったことがある。そのため、以来、歴代王朝ではとりわけ菊を賞し、かくて菊は皇族のしるしとなった。今でも御苑ではなお菊の花数百鉢を栽培しており、どの鉢も花が開くと五、六百枝もの花をつける。花が咲く時には、必ず各国の使者や諸省庁の長官・次官を招いて、終日、宴を催す

のである。

（以上、林香奈）

A　「其一二一」

狗吠聲騰馬足馳　狗(いぬ)の吠ゆる声は騰(あ)がり　馬の足は馳せ
狩衣草履古威儀　狩衣草履(かりぎぬそうく)は古の威儀なり
錦旗日曜紅輪影　錦の旗は日に曜(かがや)く　紅輪の影
來看公侯習犬追　来りて看る　公侯の犬追(いぬおう)を習うを

［韻字］馳・儀・追（上平四支）

B　①**狩衣**　丸襟で脇を縫い合わせず、くくり緒のある袖が後ろ身頃に僅かについているだけの衣服。もともと狩などの時に用いたが、平安時代には公家の常用略服となり、鎌倉時代以後は、公家、武家ともに正服または礼服として用いた。②**威儀**　厳かで礼儀正しい態度や動作。『中庸』に「礼儀は三百にして、威儀は三千なり」とある。③**錦旗**　錦の御旗。赤地の錦地に日月を金銀で刺繍したもの。鎌倉時代頃から官軍の印として用いられた。④**紅輪**　赤い太陽。唐、李咸用「暁望」詩に、「碧浪　人を催して老いしめ、紅輪　物を照して忙し」（『全唐詩』巻六四五）とある。⑤**公侯**　もとは公と侯の爵位を言うが、後に貴族や高官を指す。『礼記』王制に「王者の祿爵を制するや、公侯伯子男の凡そ五等なり」とある。⑥**犬追**　「犬追物」の略称。自注E③参照。

C　犬は声を高くして吠え、馬は疾走する。狩衣をつけたり草履を履いたりする姿はさながら昔のスタイルそのままである。紅い太陽を縫い取った錦の御旗は日に輝く。多くの人たちが、貴族が犬追物の練習をするのを見にやってくる。

D　旧に犬射有り。竹を編みて城と為し、犬を城内に縦ち、馳逐して之を射る。皆な公卿貴人にして親から轡を執り、狩衣草履にして、牧束は古朴なり。其の磬控縦送は均しく法度有りて、名づけて犬追物と曰う。台を四隅に設け、貴客を招邀して軾に憑りて寓目せしむ。君后も亦た親から臨みて礼を観る。

E　**①磬控縦送**　磬控とは馬を進めたり止めたりすること。縦送とは矢を放ち獣を追いかけること。『詩』鄭風・大叔于田に「叔は善く射る。又た良く御す。抑そも磬め控む。抑そも縦ち送う」とあり、毛伝によれば、「馬を騁むるは磬と曰い、馬を止むるは控と曰い、矢を発つは縦と曰い、禽に従うは送と曰う」とある。また、清、馬瑞辰の『毛詩伝箋通釈』によると、「磬、控は双声の字にして、縦、送は迭韻の字なり。……磬、控、縦、送は皆な御者の馳逐の貌を言う」とある。　**②法度**　ルールや規則。『書』大禹謨に「儆戒に虞れ無く、法度を失う罔し」とある。　**③犬追物**　騎馬武者が、馬を操りつつ、犬を弓矢で射止める武術。日本では笠懸、流鏑馬とともに馬上の三物と称された。竹垣で方形の馬場を作り、折烏帽子をかぶり、直垂または素襖を着た三十六騎の騎馬武者が三手に分かれ、そのうちの四騎ずつが百五十の犬を目当てに、所定の時間内に何匹犬を射たかで争う。ただし、犬に傷をつけないように、「犬打引目」という特殊の矢を用いる。鎌倉時代に武士が平時の武芸鍛錬のために始めたものと言われる。当時は獣類を馬で追い騎射をする競技を総称して「追物射」と言い、牛を追う「牛追物」などもあったが、犬を追う「犬追物」だけが残った。戦国時代以降、実技が衰退した。元和八年（一六二二）、島津忠久が再興して以来、島津家の犬追物が有名となり、正保三年（一六四六）以来、島津家は江戸でもしばしば興行し、明治十二年（一八七九）には宮城内の吹上御苑で天覧に供したのを最後に、衰退した（『平凡社大百科事典』）。　**④憑軾寓目**　軾によりかかって見物すること。『左伝』僖公二十八年に「子玉　鬬勃をして戦を請わしむ。曰く、君の士と戯れしむるに、君は軾に憑りて之を観よ、臣の与に寓目するを得んことを請う、と」とある。

F　昔「犬射」という風習があって、竹を編んで城のようなものを作り、犬を城の中に放ち、それを追いながら射るのである。皆な貴族高官たちが自ら轡をとり、狩衣をつけ草履を履き、その装束は古風で素朴である。馬を進めたり犬を追いかけたりするのにはすべてルールがあり、これを「犬追物」と名づけている。城の四隅に台を設け、貴客を招いて轅に憑りかかって見物させる。天皇や皇后もまた自ら行幸して見物する。

G　大河内輝声と何如璋の筆談資料によると、一八七九年十二月十八日の「己卯筆話」第十五巻第八十八話及び一八八〇年一月九日の「庚辰筆話」第二巻第六話の二回にわたって、「犬追物」に関する詳しい筆談が行われている。何如璋ら公使館員による吹上御苑での犬追物見物はその間のことと考えられる。詳細は劉雨珍編校『清代首届駐日公使館員筆談資料彙編』上（天津人民出版社、二〇一〇年版）参照。

A　「其一二二」

朝曦看到夕陽斜　朝曦（ちょうぎ）より看て夕陽の斜めなるに到る
流水游龍鬬寶車　流水游龍　宝車を闘かわす
宴罷紅雲歌絳雪　宴　紅雲に罷（や）みて　絳雪（こうせつ）を歌う
東皇第一愛櫻花　東皇　第一に桜花を愛す

［韻字］斜・車・花（下平六麻）

B　①**朝曦**　朝日。曦は日光。韓愈「東都遇春」詩に「朝曦　牖（まど）より入り来り、鳥　喚ぶも昏（くら）みて醒めず」とある。　②**流水游龍**　車

馬の往来の賑やかな様。『後漢書』皇后紀上・明徳馬皇后の条に、「前に濯龍門上に過り、外家に起居を問う者を見るに、車は流水の如く、馬は游龍の如し」とある。 ③**寶車** もとは七宝を載せた車を言うが、後に派手な車を指す。唐、黄滔「奉和翁文堯員外経過七林書堂見寄之什」詩に、「駟馬の宝車 錫礼を行ない、金章紫綬 天香を帯ぶ」(『全唐詩』巻七〇五)とある。 ④**紅雲** 大きな赤い花。ここでは、雲のように広がる紅い花、満開の桜並木を言うか。韓愈の「奉酬盧給事雲夫四兄曲江荷花行見寄、并呈上銭七兄閣老、張十八助教」詩に「曲江は千頃にして秋波 浄く、平らかに紅雲を鋪くは蓋し明鏡ならん」(『東雅堂昌黎集註』巻七)とある。 ⑤**絳雪** 赤い花。明、高啓「杏園図為沈日新先生題」詩に「絳雪は紛紛として翠條に満ち、門を扣くは都な是れ病家の邀きなり」(『高太史大全集』巻十八)とある。なお唐、陸亀蒙「和襲美江南道中懐茅山広文南陽博士三首次韻」詩其三に、「桂父の旧歌に絳雪を飛ばし、桐孫の新韻に玄雲を倚らしむ」(『全唐詩』巻六二四)とある。 ⑥**東皇** 春を司る神。戴叔倫「暮春感懐」詩に「東皇の去りて後に韶華在り、老圃の寒香 別に秋有り」(『全唐詩』巻二七三)とある。

C 朝日のさすころから夕日の沈むまで花見を楽しみ、車馬は長蛇の列をなして賑やかであり、それぞれ車の派手さを競っている。桜の下で宴会を催して、宴が終わると次々と桜を歌う。春になるとまず何よりも愛するのはやはり桜なのである。

D 桜花は五大部洲に無き所にして、深紅有り、浅絳有り、亦た白き者有り。一重より八重に至るまで、爛熳極まれり。種は桜桃に類するも、花は遠く之に勝る。疑うらくは接するに他の樹を以てし、故に色相も亦た変ずるならん。三月の花の時、公卿百官は旧と皆な仮を給いて賞花す。今も亦た香車宝馬にて、士女徴逐し、国を挙げて狂うが若きなり。東人 称して花の王と為す。

墨江の左右に数百樹有り。雪の如く霞の如く、錦の如く荼の如し。余は一夕の月明に再び其の地に遊ぶに、真に身を蓬

莱の中に置くが如し。東京に名勝を以て聞こゆる者は、木下川の松、日暮里の桐、亀井戸の藤、小西湖の柳、堀切の菖蒲、蒲田の梅花、目黒の牡丹、瀧川の丹楓にして、皆な良辰美景にして、遊屐雑沓の所なり。

E　①**五大部洲**　アジア、ヨーロッパ、アフリカ、アメリカ、オーストラリアの五つの洲。地球上の大陸の総称。②**櫻桃**　ゆすらうめ。③**香車宝馬**　華麗な乗り物。韋應物「長安道」詩に「宝馬　横来して建章に下り、香車　却って転じて馳道を避く」（『全唐詩』巻十八）とある。④**徴逐**　友人同士が招いたり招かれたりして、親しく行き来すること。韓愈の「柳子厚墓誌銘」に「酒食遊戯して相い徴逐す」（『五百家注昌黎文集』巻三十二）とある。⑤**挙国若狂**　国中の人が熱狂的になっている様。『礼記』雑記下に「（子貢）対して曰く、一国の人皆な狂うが若し。賜　未だ其の楽を知らざるなり」とある。⑥**如荼**　茅の穂のように白いこと。荼とは、つばな。『国語』呉語に「万人以て方陳を為すに、皆な白裳、白旗、素甲、白羽の矰にて、之を望めば荼の如し」とある。⑦**小西湖**　上野にある不忍池のこと。黄遵憲の「不忍池晩遊詩」序に「上野に不忍池有りて、亦た西湖と名づく。近郊の勝地なり」（『人境廬詩草』巻三）とある。⑧**良辰美景**　よい日と美しい景色。謝霊運「擬魏太子鄴中集詩序」に「天下の良辰、美景、賞心、楽事の四者は並び難し」（『文選』巻三十）とある。⑨**雑沓**　多くの人で込み合う様。

F　桜は五大陸にないものであって、濃い赤や浅い紫、白いものもある。一重から八重まであって、極めて鮮やかで美しい。その種類はゆすらうめに似ているが、花はそれより遥かにすぐれている。おそらく他の樹木を接ぎ木したので、その色や姿も変化したのであろう。旧暦三月の開花のとき、朝廷の百官たちは昔はみな休暇をもらって花見を楽しんでいた。現在でも派手な乗り物で、誰もが花見に出かけており、国中の人が熱狂している。日本人は桜を花の王と称している。

隅田川の両側に数百本の桜の木があり、一望すればまるで雪や朝焼けのようであり、錦やつばなのようだ。私はある晩の

月明に再びその地を遊覧し、さながら仙境の蓬莱に身を置いたような気分になった。東京の名勝で知られたところとしては、木下川薬師の松、日暮里の桐、亀井戸の藤、不忍池の柳、堀切の菖蒲、蒲田の梅、目黒の牡丹、瀧川の紅葉などがある。いずれもよき日のよい景色であり、見物客でにぎわう所である。

G　一八九一年一月十九日、ロンドン公使館から黄遵憲が宮島誠一郎に宛てた書簡に、「春秋佳日、挙頭東望、墨江之桜、木下川之松、亀井戸之藤、小西湖之柳、蒲田之梅、瀧川之楓、一若裙屐雑沓、随諸君子觴詠于其間、風流可味。」とみえる。(『黄遵憲全集』上、三四四頁、中華書局、二〇〇五年版)

A　「其一二三」

搏花作飯勝胡麻　花を搏めて飯を作るに　胡麻に勝る
嚼蕊流酥更點茶　蕊を嚼めば酥を流し　更に茶を点ず
費盡挼莎纔結果　挼莎を費やし尽して才て結果あり
果然團子貴於花　果して然り　団子は花よりも貴し

[韻字]麻・茶・花(下平六麻)

B　①**搏**　丸めること。『礼記』曲礼上に「飯を搏むる毋かれ」とある。　②**酥**　どぶろくのような濁り酒。宋、竇苹『酒譜』異域九に「天竺国は酒を謂いて酥と為す」(『説郛』巻九十四上)とある。　③**點茶**　普通は抹茶を点てることを言うが、ここでは桜茶(桜湯)を淹れることか。　④**挼莎**　「挼挲」とも。両手ですり揉むこと。『礼記』曲礼上に「飯を共にすれば手を澤せず」とあり、鄭玄注に「澤は、挼莎を謂うなり」とある。　⑤**團子貴於花**　「花より団子」の漢訳。自注参照。

C　花を丸めて飯を作ると、ゴマより勝っている。桜の花を嚼めば、酔い覚ましになり、さらに桜湯を淹れることもできる。桜餅は両手でしっかりこねてやっと出来上がる。はたして「花より団子」という諺の言うとおりである。

D　桜飯を売る者有り、桜を以て飯に和す。桜餅を売る者有り、花を団じて餡と為し、或いは煎り或いは蒸す。諺に「団子は花より貴し」の謔有り。桜茶を売る者は、桜を点じて湯と為し、少しく下すに塩を以てし、人　以て酒を醒ます可しと謂う。花枝は或いは帽に挿し、或いは袖に裹み、或いは帯に繋ぐ。遊客の帰る時、満城皆な花なり。

E　①**桜飯**　茶飯とも。米に醤油や塩、酒などを加えて炊き上げた飯。また塩漬けの桜の花を散らすものもある。　②**桜餅**　白玉粉、小麦粉を練って焼いた薄皮を二つ折りにして小豆餡を包み、塩漬けの桜の葉で包んだ和菓子。　③**桜茶**　桜湯とも。塩漬けにした桜の花を入れて飲む湯。祝賀の席に用いる。

F　桜飯を売るものがいて、桜をご飯に混ぜたものである。また桜餅を売るものがいて、花を丸めて餅とし、焼いたり蒸したりするものである。日本では「花より団子」という諺がある。桜茶を売る者がいて、桜を湯の中に入れ、少し塩を入れる。人びとはこれで酒を醒ますことができるという。花の枝を帽子に挿したり、袖に包み入れたり、帯につけたりする。見物客が帰る時には、町中がみな花で溢れている。

（以上、劉　雨珍）

A　「其一二四」

殿春花事到將離　　殿春の花事　将に離れんとするに到る
雲似人愁水似思　　雲は人の愁うるに似て水は思うに似たり
一尺落花和淚雨　　一尺の落花　涙雨に和す
手添香土弔梅兒　　手に香土を添えて梅兒を弔う

［韻字］離・思・兒（上平四支）

B　**①殿春**　陰暦三月。春の終わり。宋、曾幾「食筍」詩に「花事　闌珊たるとき竹事の初め、一番の風味　殿春の蔬」（『瀛奎律髄』巻二十七）とある。　**②花事**　花を愛でること。楊万里「賈菊」詩に「如今　小しく寓す咸陽の市、口有りて何ぞ曾て花事を問う」（『誠斎集』巻二十三）とある。　**③到將離**　春や花が終わりを迎えようとする。清、張英「春晩」詩に「堂堂たる春色　将に離れんとするに到る、寂寂たる情懐　竹枝に付す」（『文端集』巻三十五）とある。　**④一尺**　三十二糎。ここでは両手に余るほど多いことを言うか。　**⑤淚雨**　涙が雨となって降ること。その雨。「涙雨」の用例は見あたらないが、「洒涙雨」（涙を流すような雨）という用例としては、『山堂肆考』巻十二「七夕」に、「歳時雑記に、七月六日雨有れば、之を車を洗うの雨と謂う。七日に雨あれば、則ち涙を洒ぐの雨と曰う」とある。　**⑥手添香土**　香土は散りおちた落花のことをいうか。明の朱陽仲「楊花篇」（『御選明詩』巻十二）に「焉ぞ知らん地に落ちて香土と為るを、更に憐む水に入りて浮萍と作るを」という句がある。また、龔自珍の「己亥雑詩」に「落紅は是れ無情の物にあらず、化して春泥と作り更に花を護る」とあり、落花が春泥と化して新たに花を咲かせるといった用例もあり、あるいは平仄の都合で、「泥」を「土」にかえた可能性も考えられる。また、「手添香土」に類似した用例として、宋、洪咨夔「七言三首」其一に「大学中庸、繙詠すること久し、金猊　幾度か手に香を添う」（『平斎集』巻二十三）、明、沈周「臘月二十八日立春得雨病起漫言」詩に、「小閣の櫺窻　風自ら推す、手に香炷を添えて炉灰を撥す」（『石倉歴代詩選』巻四九一）とある。ここでは落花を手に持って梅若を弔うことをいうか。

⑦**梅児**　梅若丸のこと。能の『隅田川』以来、様々な文芸にその故事は伝わる。京都北白川の吉田少将維房（これふさ）の子で、比叡山の稚児となったが、大津において商人に拐かされ、奥州に向かった。道中、病となり、隅田川に投げ込まれ、隅田の人々の介抱むなしく、三月一五日、十二歳で亡くなりこの地に葬られたと伝えられている。

C　春の終わりの花見に行けば、桜は散りかかっている。雲は人が愁いを抱くかのように湧き、川は人が物思うかのように静かに流れている。両手に余るほどの落花は、梅若の命日に降る涙雨と一緒になって降りそそぐ。人々はその落花を手に、梅若丸を弔うのである。

D　墨江（すみだがわ）の左右の堤、桜花　数百樹あり。木母寺（もくぼじ）の旁に、一墳有りて梅児と名づく。相い伝うるに古に美人の梅若有り、三月十五日を以て化し去ると。是の日雨に遇うに、都（み）な俗に之を涙雨と謂う。名流　花を賞するに、必ず其の墳を弔う。

E　①**墨江**　隅田川。堤（墨堤）は桜の名所として古来名高い。②**木母寺**　東京都墨田区にある天台宗の寺。隅田の人々が梅若丸のために塚を作り、印の柳を植えたという梅若伝説から、梅若寺と称されるようになり、天正一八年（一五九〇）に徳川家康が訪れて、梅柳山という山号を与えられた。慶長十二年（一六〇七）に木母寺に改号。明治元年（一八六八）、廃仏毀釈により廃寺となるが、明治二十一年（一八八八）に復興した。③**美人梅若**　梅若丸のこと。自注B⑦参照。「美人」とするのは、或いは黄遵憲の思い違いか。

F　隅田川の左右の堤には、桜の木が数百も植わっている。木母寺のそばには、一つの墓があって、梅若の墓と呼ばれている。昔、梅若という美人がいて、陰暦の三月十五日に亡くなったと伝えられている。この日に雨が降ると、俗に涙雨という。

文人墨客が花見をするときには、必ずこの墓にお参りをする。

A　「其一二五」

鏡檻新開響屧忙　　鏡檻（きょうかん）　新に開き　響屧（きょうげき）　忙なり
溶溶四壁照花光　　溶溶たる四壁　花光に照らさる
爲渠一笑三年住　　渠（かれ）の一笑の為に三年住（とど）まり
卻記衣襟未染香　　却って記す衣襟に未だ染まらざるの香

［韻字］忙・光・香（下平七陽）

B　**①鏡檻**　宮中に設けられた四壁に鏡を置いた「鏡殿」の中の欄干。『北斉書』巻八帝紀・幼主に「其の嬪嬙（ひんしょう）の諸宮中に、鏡殿・宝殿・瑇瑁（たいまい）殿を起こす。丹青彫刻、妙なること当時を極む」、明の楊慎「鏡殿」に、「唐の高宗の鏡殿を造れるは、武后の意なり。四壁皆な鏡を安（お）くは、白昼秘戯の需の為なり」（『升庵集』巻六十）とある。また、李商隠「鏡檻」詩に「鏡檻　芙蓉入り、香台　翡翠過ぐ」とあり、朱鶴齢の注に「鏡檻は水檻なり。水光は鏡の如し、故に鏡檻と曰う。…又た高宗の時、武后鏡殿を作る、四壁　皆な鏡を安くは、白昼秘戯の須の為なり。鏡檻は当に是れ鏡殿中の欄檻なるべし」とも見える。　**②響屧**　春秋時代、呉王の宮中の廊。現在の江蘇省蘇州市霊巌山にあった。「屧」は木製の下駄。呉王が西施らにこれを履いて歩かせると、わたどのにその音が響いたことから、「響屧廊」と名付けられた（宋、范成大『呉郡志』巻八）。　**③溶溶**　広々としているさま。　**④第三句**　実藤氏は、『列子』巻二黄帝第二に「三年の後、心敢て是非を念わず、口敢て利害を言わず、始めて夫子の一眄（べん）を得るのみ。五年の後、心更に是非を念い、口更に利害を言い、夫子始めて一たび顔を解きて笑う」とあるのによるとするが、この句は、韓愈の「劉生詩」に「越女　一笑して　三年留まり、南のかた横嶺を逾（こ）え炎洲に入る」（『五百家注昌黎文集』巻四）とあるのを踏まえると思われる。なお、花と三年との関わりでは、宋、韓元吉「偶

興」其四に「水仙の成るを愛し百計もて栽し、三年にして一笑し漸く能く開く」とあり、その注に「世に言う水仙は一たび移さば三年にして乃ち開く」（『胃南澗甲乙稿』巻六）という例もある。

C　できたばかりの鏡殿のような会場に、多くの参観者の靴音が響く。広々としたガラス張りの四壁には、花と光が照り映えている。咲き誇るその花々の美しさは、三年も足をとめてしまうほど。衣服に移らぬほどのほのかなその香りが、かえって観る者の記憶に残る。

D　東京　毎に闘花会有り。任輦車牛、名種　畢く集る。四壁毎に玻璃を嵌め、光影　迷離にして、四禅天に到るが如し。士女　裙屐し、雲の集まるがごとく鱗萃す。日本の諸花は、顔色敷腴にして、光艶　独り絶す。或いは言う華種に比校するに、香味　少しく遜り、鼻観　徐に参ると。其の語　真実にして虚ならざるを知るなり。

E　**①闘花会**　花競べ。江戸時代から花の品評会が浅草や京都などでしばしば行われた。　**②任輦車牛**　さまざまな乗り物。任は負うこと。輦は手車。『詩経』小雅・黍苗に「我が任我が輦、我が車我が牛」とあり、毛伝に「任者、輦者、車者、牛者」、鄭箋に「謝を営み転餫するの役に、負任する者有り、輦を輓く者有り、車を将く者有り、傍牛を牽く者有り」とある。　**③迷離**　ぼんやりとしているさま。『楽府詩集』巻二十五「木蘭詩」に「雄兔　脚は撲朔、雌兔　眼は迷離」とある。　**④四禅天**　「色界」（三界の中で、欲望を超越はしたものの、物質性にとらわれた境地）における初禅天・第二禅天・第三禅天・第四禅天の四つの段階を経て到達する世界。　**⑤裙屐**　美しく着飾ること。「裙」は裳裾。「屐」は下駄。『魏書』巻六十五邢巒伝に「蕭深藻は是れ裙屐の少年にして、未だ政務に洽からず」とある（『北史』巻四十三にも同様の記事が見える）。　**⑥雲集鱗萃**　「雲集」は、雲のごとく集まり盛んなさま。『後漢書』岑彭伝に「皇帝

より命を受け、燕趙を平定し、尽く幽冀の地有り、百姓帰心し、賢俊雲集す」。「鱗萃」は群がり集まるさま。『史記』司馬相如伝に「珍怪鳥獣、万端鱗萃す」とある。⑦**敷腴**　色つやがいいこと。鮑照「行路難」に「人生苦しみ多く歓楽少し、意気敷腴にして盛年に在り」（『芸文類聚』巻三十）とある。⑧**鼻観**　鼻のあな。また、鼻でにおいを嗅ぐこと。蘇軾「和黄魯直焼香」詩其一に「是れ聞思の及ぶ所にあらず、且に鼻観をして先ず参ぜしめんとす」、黄庭堅『山谷外集』巻七「題海首座壁」詩に「香寒くして鼻観に明らかなり、日永くして頭陀を称す」とある。

F　東京ではいつも闘花会が開かれる。ありとあらゆる乗り物で、有名な品種の花が尽く集められる。会場の壁はぐるりとガラスが嵌め込まれ、光でぼんやりとしていて、まるで四禅天に至ったかのようである。男女は着飾って、群がるように集まってくる。日本の花々は、色鮮やかで、その艶やかさは卓絶している。ある人が言うには、中国の品種と比較してみると、その香りは少しく遜るけれども、ゆっくりと鼻に漂ってくる、と。その言葉は本当に嘘ではない。

A　「其一二六」

銀字兒兼鐵騎兒　銀字児と鉄騎児と
語工歇後妙彈詞　語は歇後に工にして弾詞に妙なり
英雄作賊鴛鴦殉　英雄は賊と作り鴛鴦は殉う
信口瀾翻便傳奇　口に信せて瀾翻し便ち奇を伝う

［韻字］兒・詞・奇（上平四支）

B　①**第一句**　「銀字児」はもと管楽器の名。笛に銀で文字を記し、音の高低を表示したもの。白楽天「秋夜聴高調涼州」に、「楼上の

金風　声漸く緊し、月中の銀字　韻初めて調う」（『白氏長慶集』巻三十一）とある。「鉄騎児」は騎兵のこと。『南宋雑事詩』巻六にこの一句と同じ句が見え、その自注に「銀字児は、煙粉・霊怪・伝奇を謂う。鉄騎児は、士馬金鼓の事を謂う」とある。ここでは、「銀字児」は講談で演じられる世話物や怪談などを、「鉄騎児」は軍記物などを指す。補注G参照。**②歇後**　歇後語。成句の前半部分だけを言って、後半を省略し、その内容を推測させる言葉遊び。**③彈詞**　弦楽器などの伴奏を伴う説唱文学。詞や曲とせりふにより、物語を語り歌うもの。**④信口**　「信」はまかせる、の意。口からでまかせを言うこと。**⑤瀾翻**　波が揺れるようにわき上がるさま。韓愈「記夢」詩に「陬維を挈携し口瀾翻たり、百二十刻　須臾の間」（『五百家注昌黎文集』巻七）とある。また、一八七八年六月十四日に行われた黄遵憲と宮島誠一郎の筆談中の唱和詩（『黄遵憲全集』上、七二二頁、中華書局、二〇〇五年）に、「舌は語を伝うること難きも筆は能く通じ、筆舌瀾翻すれば意未だ窮まらず」とみえる。

C　世話物や軍記物など、巧みに落げを用いながら、語ってきかせるその技は素晴らしい。英雄が賊となったり、妻や恋人が後追いしたり、口から出任せをいうように次から次へと言葉が湧いて出てきて、不思議譚を語るのである。

D　古今の事を演述するは、之を演史家と謂い、又た落語家と曰う。笑い泣き歌い舞い、時に児女の態を作し、傖荒の語を学ぶ。演ずる所の事実は、口に随いて編撰す。其の歇語は必ず人をして解頤せしむ、故に落語と曰う。

E　**①演述**　ひきのばして述べること。南宋、陸游「園覚閣記」に「名山の盛事、本末閎濶にして、区区たる筆力の能く演述する所に非ず」（『渭南文集』巻十八）とある。**②演史家**　講談を演じる人。講釈師。**③傖荒**　「傖」は、粗野で田舎じみていること。南朝の人が北朝の人をさげすんで言った。「傖荒」は、人間が粗野で、土地が田舎で荒れていること。欧陽修「謝国学解元啓」に「梁に入るこ

と茲に久し、敢て英俊の並び遊ぶに期す。論は都(み)な未だ成らず、殆ど傖荒を以て而して隔てらる」とある。④**歇語**　歇後語。自注B②参照。⑤**解頤**　あごがはずれるほど大笑いをする。『漢書』匡衡伝に「諸儒　之が為に語りて曰く、詩を説く無し、匡　鼎(まさ)に来る、匡　詩を説かば、人の頤(おとがい)を解く」とある。

F　古今の出来事を語り聞かせる人を講談師という。また落語家と呼ばれる人もいる。笑ったり泣いたり歌ったり踊ったり、時には子どもや女性の仕草をしたり、田舎者の粗野な物言いをまねたりする。演じる事柄は、口にまかせて作り上げられたものである。その落げは必ず人を笑わせる内容なので、落語というのである。

G　勵鶚『南宋雑事詩』巻六に、講談の様子を詠んだ詩がある。

詩：説史堪嘲王与之、舌端今古尽伝疑。一時煙粉偏忺聴、鉄騎児兼銀字児。

自注：『白獺髓』、行都、紹興間、有三市井人好談今古、謂戚彦・樊屠・尹昌也。彦乃皇城司快行、屠乃市肉、昌乃傭書。有無名人賦詩曰、戚彦樊屠尹彦時、三人共坐説兵機。欲問此書出何典、昔時曽看王与之。与之、乃説書史人。都城紀勝説話有四家。銀字児、謂煙粉霊怪伝奇。鉄騎児、謂士馬金鼓之事。

（以上、林　香奈）

（はやしかな・京都府立大学准教授）

（りゅうちん・中国南開大学教授）